

明治期における日本人キリスト者の「他界観」

中 野 敬 一

The Ideas of “Other World” of Japanese Christian in the Meiji Era

NAKANO Keiichi

Abstract

Christianity was first introduced into Japan in 1549 by the Catholic missionary, Francis Xavier. However, Christians were persecuted quite strongly by the ruling forces of the time. By the mid 17th century, missionary work conducted in public had completely ceased to exist. Christianity was re-introduced into Japan in 1859. In the Meiji era various sects of Protestant and Catholic missionary groups from various countries, particularly from the United States, arrived in Japan once again and started their missionary work.

Missionary groups introduced Japanese to Christian ideas of the other world (afterworld, the world beyond) and Japanese who became Christian believed what the missionaries taught. What kinds of ideas have Japanese accepted and developed? To know the ideas of the other world of Japanese converts in the Meiji era, we study sermons and articles by famous Japanese preachers (such as Jo Nijima, Masahisa Uemura, Kanzo Uchimura and so on), tracts written by missionaries, and hymns that Christians in Japan used in the Meiji era.

Studying these materials, we could see some common characteristics of the ideas of the other world. The preachers or missionaries insist that there is a “Heaven” with God. In heaven, the deceased have peace and happiness, and can meet God and the other dead who already were there. In particular, “to meet again” with family members or friends are significant words for hope in Heaven. The Japanese Christians who believed these ideas must have been comforted and given hope for their future. The important thing that we have to confirm is that we could not see any specific image of Heaven or Hell. For example, they did not talk about the form or shape of Heaven, or the condition of the deceased.

キーワード： 他界観、天国と地獄、日本のキリスト者、明治期の宣教師、説教とトラクト、讃美歌

Key words: Idea of other world, Heaven and Hell, Japanese Christian, missionary in the Meiji era, sermon and tract, hymn

はじめに

日本人の「他界」観（「来世」観、「あの世」観）は長い年月を経て確立されてきた。地域の文化や伝統において差異が見られるので、「日本人の他界観」として一括することには無理があるが、それでも民間信仰や原始神道、そして仏教の死生観を基礎とする他界観を人々はだまかに共有してきたと言ってもよいだろう。

その日本に江戸末期から明治にかけてキリスト教が伝来した。以前（16世紀）にもローマ・カトリックの宣教師が日本にキリスト教を伝えており当時の社会に少なからずの影響を与えたが、禁教政策により厳しい弾圧を受けてキリスト教宣教は事実上途切れてしまった。ローマ・カトリックを含めてキリスト教があらためて広く認知されるようになるのは明治以降である（なお本論において「キリスト教」という場合は、「プロテスタント」諸教派によるキリスト教を指す）。

明治期の日本にキリスト教を伝えたのは主に欧米からの宣教師たちである。彼らはキリスト教教義や思想を伝え、関連するキリスト教の他界観も日本にもたらした。そして宣教師と出会ってキリスト者となった人々は、その他界観を受容し発展させていった。その内容を考察するが本論の目的である。

キリスト教の他界観は、正典である旧・新約聖書においても明らかにされているとはいえない。 「天（天国）」や「陰府」、「地獄」といった用語やその存在に関する記事は見られるが、詳細な説明は無い。死後の運命に関しても同様である。例えば新約聖書のパウロ書簡においてはイエスの再臨や終末、復活に関連して言及されているが、死者がどのような状態に置かれているかについてほとんど語られていない。つまり今日一般的にイメージされているキリスト教の他界観は聖書を根拠としたものではなく、長き歴史において様々な文化や思想と融合しながら形成されたものなのである。なかでもローマ・カトリック教会の影響は大きく、天国や地獄、煉獄に関する教義や思想によってキリスト教他界観は大きく発展した。芸術家によって描かれた絵画等を通じて我々はそれを知ることができるだろう。ただし、その他界観も宗教改革以後、「聖書のみ」を原則とするプロテスタントにおいては比較的抑えられたものとなる。聖書に確かな根拠を見出す事ができない「煉獄」の存在が否定されたのも一例であろう。さらに、近科学技術の進歩による近代化により、迷信や俗説が後退し、他界に対する人々の考えも大きく変化していった。

19世紀のプロテスタントの宣教師たちが日本に伝えたキリスト教の他界観はこのような状況の延長線上にある。つまり盛んに他界について論じられた時代とは異なり、比較的抑制のきいたキリスト教他界観が伝えられたと想像する。ただし、そうであったとしても、もたらされた他界観はそれ以前の日本のものとは異質なものであり、初めて触れることになった明治期の日本人に与えた影響は少なくない。キリスト者となった日本人たちは、教えられた他界観と既に自分たちが持っていた他界観と比較しながら受容し、独自の他界観へと発展させたと思われる。

る。

明治期のキリスト者の他界観を知るために、当時の説教集や論文、トラクト、讃美歌を考察する方法をとる。教派的伝統やその神学、個人の信仰による差異があるが共通項を見出していくことにする。

1. 宣教師による葬儀から

最初に宣教師がもたらした他界観について触れておく。明治期に来日した宣教師は葬儀において何を語ったのであろうか。実のところ資料は少ない。葬儀をした記録があっても、語られた説教等は殆ど見当たらない。その状況をふまえたうえで、一つの例を挙げる。神戸の北に位置した三田藩最後の藩主であった九鬼隆義(1837-1891)の娘の葬儀である。九鬼は避暑で有馬に来ていたアメリカン・ボード宣教師のJ.D. デーヴィスと交遊をもつようになった。明治政府により切支丹禁制の高札の撤去命令が出される1873年の前年の出来事である。

九鬼の長女である肇(ちょう)が1873年5月に5歳で病没した。そしてデーヴィスの司式によりその葬儀が行われた。九鬼は洋装断髪や西洋風の生活を行うなど、新たに日本に入ってきた西洋文明をいち早く受容していたというが、娘の葬儀をキリスト教式で行うように依頼したことは極めて異例であった。しかも切支丹禁制の高札が撤去されたとはいえ、直後でもあり人々に大きな衝撃を与えたことは想像に難くない。この娘の葬儀では何が行われ、語られたのであろうか。デーヴィスが「覚書」として残し、O. ケーリがそれを紹介している。

昨年春、彼らの小さな子供たちの一人が死んだ。そのとき、悲嘆に暮れている友人は、西洋風の仕方で埋葬してくれないか、と要望してきた。そこでわれわれは、苦心して、最良の樟脳の木で組み立てられた棺を作り上げ、愛らしい手を組み合わせ、棺の中に美しく寝ているような姿で横たえ、最高に美しい花輪ですべてを飾ったが、悲しみに心が打ちのめされている人々の熱心な要望にも続き、デーヴィス夫人は彼らにイエスのことと天国のことを語り、彼らの最も愛していた者が永遠の安らぎの中にいることを確信させ、われわれの望みは天国での無上の喜びにあることに目覚めさせ、新しい世界がいま彼らに開かれるに至ったことを確信させ、悲しみの涙と喜びの涙とを混ぜ合わせにした¹⁾。

語られた主旨は、「天国」における死者の状態である。「安らぎ」や「無上の喜び」という言葉を用いて遺族を慰めようとしている。九鬼らは明治以降初めてキリスト教に触れた人物の一人であり参列者たちも含めて、そこで見た行為や語られた言葉に強い印象を与えられたことと想像できる。

九鬼は約5年後に別の娘も亡くしている。その葬儀もデーヴィスの司式によって行われたようである。『七一雑報』(第3巻15号、明治11年4月12日発行)には「華族九鬼君の息女葬りの話」という記事が掲載されている²⁾。葬儀においてデーヴィスは、以下のマルコ福音書10章13-16を引用した。

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

デーヴィスは、この聖書の話を紹介し、神は亡くなった幼子を御許に抱き取ってくださると述べたという。そして亡くなった娘は、5年前に死去した姉（肇）と神の前で楽しく遊んでいると述べ、遺されたものも再び会えることを楽しみにしてそれを願うようにと奨めている。葬儀において語られた内容は、先の長女の葬儀よりも具体的な描写がなされている。このような話題が『七一雑報』に掲載されたことで、読者を通じてその内容がキリスト者に広く伝わったと思われる。

注目することは、デーヴィスが神の国（デーヴィスは「天国」と理解している）における幸福と、死者同士の再会を述べている点である。この聖書箇所は、今日でも幼子の葬儀においても使用されることが多く、子どもを招いて受け入れたイエスの姿勢に読者は慰められる。ただしイエスが説いた「神の国」とは神が支配される世界を指すのであり、終末的にこの世に実現するものと考えられている。つまりここで言われている「神の国」（並行箇所であるマタイ福音書19章13-15では、「天の国」）は、人が死後に行く世界、すなわち一般的に使用される所謂「天国」としてイエスは語っていないのである。しかしデーヴィスは、神の国は人が死後に望み行く「天国」というように解釈を提示していて、後述するように『真（まこと）の道を知るの近路』というトラクトでもそれを示す祈りを記している。

デーヴィスのような解釈は彼独自のものではなく、広く共有されていたと思われる。一例として挙げたいのが、『七一雑報』（第一巻38号、明治9年9月22日）の一投書である。投書名は北村某となっており詳細は不明だが、「女子天に帰るの話」という題が付いている。7歳ほどの女子が不治の病に罹り臨終に近づいた折に、母親にこの箇所を読んでほしいと願ったという。彼女はその後母親に礼を述べ、救い主イエスの所にいきと言いい、「未来は共に天国の神と耶蘇（イエス）との目の前で楽しき世をば送らん」といときを告げた。子どもの言葉や態度とは思えないほど立派な態度である。彼女の理解では聖書における「天の国」は明らかに「天国」を意味しており、その天国に向かおうとしている自分は子どもであるがゆえに妨げられることはないことを確信している。そして、その天国で母親と再会できることを信じているのである。どのような立場にあった子どもであったのか特定することは難しいが、このような天国観を当時のキリスト者が広く持っていたことを示す例であろう。

2. 説教や論文等に見られる他界観

それではここから、明治期のキリスト教会で語られた説教や論文等を見よう。他界観に関するものと言えば、葬儀・告別式における説教を扱うことが適切であろう。ただしその数は比較的少ない。一般人の葬儀における説教が公開されることは稀であり、著名人の葬儀の場合で

あっても説教の全文が記録として残っていない場合が多い。このような事情により、集めた資料に偏りがあることを前提にしつつ、他界観に関する内容を考察する。

（１）新島襄（1843-1890年）の説教稿より

明治期を代表するキリスト者であり、キリスト教主義学校である同志社を創立した新島は、アメリカで神学を学び、アメリカン・ボードから宣教師として日本に派遣された。学問としてだけではなく、肌で感じたキリスト教他界観を日本に紹介した人物とも言えよう。彼の説教稿（説教作成のためのメモのようなもの）が集録されており、告別式に関するものもある。伊勢峰の告別説教稿³⁾を引用しよう。新島はラザロの復活物語（ヨハネ福音書11章）を引用し、「ラザロ四ケ目ニ復活ス、吾人基督ヲ信スルモノハ、何時カ数千百年万年ノ後カ又復活スベシ」とある。後半には「宇宙別ニ靈界ナル天国アルアリ」という言葉も見られる。キリストを信じる者は死んでも、将来復活するという希望を述べている。

沢山保羅告別式の説教稿⁴⁾も残されている。「地上ノ安息ヨリ天上ノ安息ニ移ル」、「今ハキリストノ栄ヲ見テ其ノ栄ヲ受ケ喜マル、ヘシ」、「嗚呼地上ニ此ノ良友ヲ失ヒタレトモ天上ニ一人ノ良友ヲ加ヘタリ」という言葉が見られる。沢山は天上で安息を得て、キリストの栄光を見ているという。また、地上では一人が失われるが天上には一人加えられることが述べられており、新島が信じていた他界観の一端を知ることができる。

（２）植村正久（1858-1925年）の説教より

明治期を代表するキリスト者の一人である植村正久が他界観に関して語っていることを取り上げよう。彼は、「死は何を意味するか」という題で説教⁵⁾をしている。まず、フィリピの信徒への手紙で使徒パウロが、一方では此の世を去ってキリストと共にいたいと熱望しており、他方では人々のために生きることが必要であると板挟みになっていた心境にあったことを引用する。そして、死は「人を此の世よりも高貴に且つ安らかなる所に移す光の天使なり」、あるいは「死は現在に於いてよりも一層深く神と結び、之と親しむことなり」という解釈を述べている。また、死者について「神を遠ざかるに非ず、いよいよ神に近づくなり。現世の家庭に不在なるは神の家庭に在宅することなり…」と続ける。植村は決して生を軽んじているわけではないが、パウロの言葉を基にして、死後の状態や「死」という出来事を肯定的にとらえているのである。

植村は「生者と死者」という題で講演⁶⁾を行っている。そこでは冒頭から他界（植村の言葉では、「来世」）について語られている。

基督の教へられた中に、来世に関することあるを忘れて、神の国は唯だ現在の世界にのみ限ったことの様に考へる者がある。此は大いなる誤解と言わねばならぬ。主耶穌は明白なる言を以て、死後の事を教へられた。且つ其の為された行動に於ても、靈界の事に就きて其の精神のある所が判然理會される様に思はれる⁷⁾。

このように述べた後、イエスが「わが父の家に住宅多し」（新共同訳「わたしの父の家には住む所がたくさんある」ヨハネ14章2）と弟子たちに告げた内容を以下のように解釈している。

如何にも子が其の愛する父の家を説くものの気色、手に取つて見ゆる如くに感ぜられる。父の家に満足してさも懐かし相に、また得意らしく、恰も長者の子が黄昏の頃旅路に疲れた行客を慰めて、わが祝福多き父の家を指して一夜の宿りを与えんと説き勧むる様である⁸⁾。

植村は「来世」の具体的な情景をイエスが語った「父の家」という言葉から想像している。まるで植村自身が見てきたような表現でもあり、その他界観を知ることができる。また、イエスが十字架上で犯罪人の一人に「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ福音書23章43）と言われたことを引用し、この場面ではイエスが「己が手の裡に握つたものを説くが如く」来世について語っていると説き、来世存在の確信を述べている。

さらに、植村は、キリスト者である生者と死者の交流（植村は「交通」という言葉を使用）について、仏教の「盂蘭盆会」の思想を用いて説明している。迷信や不道德からなる（仏教の）盂蘭盆会はやがて無くなる。しかし、「基督教教徒は生者死者の交通に関する盆の真理を保存し、之を潔めて活用すべき筈である」と述べ、次のように続ける。

我々も聖徒の交りは云ふまでもなく、愛する死者と旧交を温め、其の親みに深く入り込んで、疎からんとする情を厚からしめ、兎角物質的に傾き勝ちな此の俗腸を洗濯したいものである⁹⁾。

植村の解釈をまとめると、キリスト者は死ぬと、父（神）の家に行き、そこで迎えられ、用意されている場所で平穩に過ごすことができる。さらに盂蘭盆会の思想のように、死者となっても生者と交流も果たすことができると考えていた。

（3）内村鑑三¹⁰⁾（1861-1930）の論文等より

内村鑑三は伝道者であり、神学者、文学者、キリスト教思想家である。アメリカでの留学生活を経験しており、キリスト教他界観についても豊富な知識を持ち、「死」に関する論文も多い。「愛するものゝ失せし時」という論文では、まず、死後の快樂のために現世において善行に励むことはキリスト教の精神ではないと断る。しかし、彼は死後の先にある未来の存在を否定しているわけではなく、「未来の觀念」の必要性を説く。そして、死後における良い運命の獲得こそ目的にはしていないが、「天国」における希望を明確に述べている。

余は天国と縁を結べり、余は天国でふ親戚を得たり、余も亦何日か此涙の里を去り、余との勤務を終へて後永き眠りに就かむ時、余は無知の異郷に赴くにあらざれば、彼が曾て此世に存せし時彼に会して余の労苦を語り終日の疲労を忘れむと、業務も其苦と辛とを失

ひ、喜^{よろこび}悦を以て家に急ぎし如く、残余の此世の戦ひも相見む時を楽しみに能^よく戦ひ終へし
後^{のちうれ}嬉しく逝かむのみ¹¹⁾。

天国は親しい存在で、喜んで向かう場所であり、死者と再会できることを期待している内村の
思いが伝わる。

次に挙げるのは、キリスト者である夫妻が亡くした息子の記念会において、内村が述べよう
と腹案したものである。当日内村は欠席できず、後日筆に記して「悲歎と歓喜」という題で雑
誌に掲載した¹²⁾。

死を悲しむの悲歎^{かなしみ}は人を送るの悲歎です。私供の間より愛する者の一人が消え失せし事を
悲しむの悲歎であります。然しながら送らるゝ者は又迎へらるゝ者であります、而して迎
へる者は送る者とは全く異なり大に歓ぶのであります…今日私供が現世^{このよ}に於て悲しみます
時に彼世^{かのよ}に於て又歓ぶ者があるに相違ありません…彼は少しも孤独を感じず、不自由、
危険等は少しも無いのであると思ひます…。

「現世」で死者を送る者は悲歎であるが、「彼世」で迎える者にとっては歓びであり、死者は
孤独も不自由も、危険も無い状態にいることを語る。現世と彼世を対比させながら、彼世にお
ける歓びを述べていて、内村の他界観（彼世観）をかなり明確に把握できる。さらに、内村は
続ける。

死は結婚の一種ではありませんまい乎、葬式^{かなしみ}の悲歎と云ふは里方の親が其の女を嫁に遣^やる時
の悲歎ではありませんまい乎、若し爾うでありますならば、死は悲歎のみの事ではありませ
ん、悲歎は僅かに其反面であります。泣く生みの親がおりますれば歓ぶ新郎^{はなむこ}があるのであ
ります…女は旧き家を去りて寄方なき孤独者となつたのではありません。彼女は真正^{ほんとう}の家
に入つたのであります…私供の愛する者は其旧き私供の家を去りて新しき新郎即ちキリス
トの家^{むすめ}に往いたのであります。

死者を送り出す遺族が花嫁をおくる親、迎える者であるキリストが新郎という比喻を用いる。
先の例と同様、現世と彼世を対比させて、彼世における大きな幸いを説明しているのである。
現世と彼世を対比させ、一方におけるマイナスが一方におけるプラスになるという発想は、先
の新島襄の沢山保羅の説教稿に挙げていたものと共通のものがある。

このような信仰を持っていた内村は、「如何したら平和に死ぬるか」¹³⁾ という説教で、キリ
スト教信仰において「少しも恐れなくて死んだ実例」を紹介する。米国に留学して帰国した某
氏の例である。危篤の折、周りの友人達が泣いて居るのをみて、某氏はずっと立ち上がり、そ
んなに悲しんではいけないという意を示して天を仰いで三つ手を叩いて死んだという。内村
は、キリストを信じるならば、このような平和な死が可能だとする。

さらに「天国へ嫁入りするから赤い着物で祝ってくれ」と遺言した後、笑って死んでいった

老婆の話や、内村の娘が病床にあっても不平も言わず心穏やかに亡くなった話、宣教師ニコライが臨終際に身体を清浄にして仕事を終わらせた様子等を挙げ、それぞれ見事な死に様であったことを紹介している。そして、このような死に方をしたいのなら、我々もキリストの弟子になる方法以外には無いと力説したのである。

死後の世界における平安、また穏やかに死を迎えた人の実例、これらを通じて内村の信仰やそこにおける希望を見ることができるであろう。ただし、いずれにおいても死後の世界の具体的描写を見ることはできない。

（４）柏木義円¹⁴⁾（1860-1938年）の論説より

反戦論の伝道者として著名な柏木は、彼が主宰する『上毛教界月報』114号（明治41年）で「母の死に就いて」という論説を載せている。彼の先祖は江戸時代に僧侶となり一寺を起こし、義円の母親はその寺を継承し仏教への信心が厚い人であった。ただし、家族が信仰するキリスト教に対してかなりの好意をもっていたようである。礼拝にも出席していたという。しかし、やはり寺を守るという立場ゆえに改宗には至らず亡くなった。

柏木は母がキリスト教の洗礼を受けずに亡くなったことを遺憾であったと述べている。そして「天国にて再会せん」との辞を遺して逝ったならば、逝った者も遺された者も如何に幸いだろうかと述べている。その思いが彼の伝道者としての使命を強くしたのであった。

予は母の死に由りて、人の母をして『天国にて再会せん』との言葉を遺して逝らしめたく、人の子をして此言を以て送らしめたく、此れ人生の一大幸福なりと信じて一層伝道の念を厚ふせり¹⁵⁾。

（５）藤井武（1888-1930）の論文より

藤井は内村鑑三の弟子であり、内村同様に無教会運動の伝道者として活躍した。「来世研究」（「天国に関する研究」等）を行い、その点においてもよく知られている人物であるので取り上げる。彼は妻が先立った時の心情を「夕に我が妻死ねり」と題して、著作『羔（こひつじ）の婚姻』の冒頭に記している。「私の悲みは実に無限であることを」と告白しながら、妻の臨終の様子を回顧する。

恐るべき呼吸困難とそれに基づく心臓麻痺との苦痛の中にありて一たび聖召を自覚するや、静かに、而も明確に、「天国に、いい場所を備へて、待つてゐます！」其時の彼女の平安！ 愛の聖手^{みて}に支へられずして、誰が斯の如くに世を去り得るか¹⁶⁾。

妻の「いい場所を備へて…」という言葉から、藤井は「彼女は私の為に又他の愛する者の為に天国に善き場所を備へんが為に召されたのである」という希望を得た。ここで言う「いい場所を備へて…」は聖書におけるヨハネ14章1-3のイエスの言葉に関連する。

心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。

藤井は、世を去った妻が主イエスと共にいて、自分の為に「いい場所」を用意してほしいと主に願ってくれていると確信している。その前提として、天国の存在を信じており、さらにそこにおける妻との再会を信じていることがわかる。ただし、備えられている「いい場所」とは具体的にどのような状態であるか、あるいは、亡くなった者がどういう状態にあるかやはり詳しく述べていない。

（6）山室軍平（1872-1940年）の著書より

明治期に活躍した人物として山室軍平を取り上げる。彼は救世軍という教派に属し、社会福祉事業においても活躍した人物である。大衆にわかりやすい説教がなされ、代表的な著書『平民之福音』は多くの人々に読まれた。その中で現世や天国について述べている。

私し共が現世に居る有様は、譬へば田舎の阿爺が、其息子を、都へ修行に出して置く様なものであります…私し共は現世で、三十年と五十年の修行を済し、頓て天の父様が在す、^{たましい} ^{ふるさと} 靈魂の故郷、即ち天国へ帰って行くべき者であります…現世で神様に逆らひ、我が儘なる振舞をして居る者を、神様は裁判して後に、地獄の刑罰にお遣せなされます。然り乍ら油断なく勉強して、錦を着て故郷に帰る息子を…喜んで天国に迎へ、之に^{かぎり} ^{さいはひ} ^{あんらく} 窮なき幸福と平安とを与え給ふことであります¹⁷⁾。

人間は神によって天国から遣わされ、再びそこに帰って行く存在である。現世における生は修行のようなものだとし、天国への帰郷が目的であるかのような思想が見られる。しかも、神の裁判や「地獄」についての言及がなされているのが先に挙げた人々と大きく異なる点である。これは山室が信仰する救世軍の教理にも基づくと思われる。「靈魂の不滅、身体の復活、世の終わりの総審判、正しき者の永遠の幸福、及び悪しき者の永遠の刑罰を信ず」という教理がある。ただし、「天国」や「地獄」という用語は、後述する明治期のトラクトにおいても多くの記述が見られ、救世軍や山室独自のものではない。しかも地獄での裁きを強調することではなく、神への信仰を持つことで天国に迎えられる福音を告げることが目的であり、そこに主眼を置いていると思われる。さらに「地獄」という用語は一般にも馴染みがあり、キリスト教伝道を行う時にも天国と対比させて話すほうが好都合であったと思われる。いずれにしても、地獄や天国の存在を示している山室でも、その詳細について描かれてはいないことを確認しておきたい。

ここまで明治期を代表するキリスト教伝道者たちの説教から他界観を考察してきたが、いくつかの共通項が見られる。①他界としての天国が存在する。②天国には、神によって個々の死

者に備えられた場所がある。③天国では亡くなった人と再会できる。④ただし、天国についての具体的な（写實的な）描写は無い、ということである。

3. トラクトに描かれている他界観

初めてキリスト教に触れる日本人に向けて、宣教師は「トラクト」（キリスト教の伝道用小冊子）の発刊に努めた。その殆どを秋山憲兄が著書『本のはなし 明治期のキリスト教書』（以下『本のはなし』）で紹介している。その成果を引用しながら、吉野作造らが1928年（昭和3）に発刊した『明治文化全集 第十一巻』（以下『明治文化全集』）に収められているトラクトを考察する。いずれも明治初期に出版されたものであり、宣教師や初代のキリスト者が日本人に伝えようとした内容の中心となるものを知ることができる。

最初に秋山の『本のはなし』に掲載されている二つのトラクト、続いて『明治文化全集』に掲載されているトラクトを考察する。

(1) 『^{まこと}眞の道を知るの近路』¹⁸⁾

まず秋山は明治期トラクトの「代表的な一つ」として私蔵するJ・D・デビス（このトラクトには「デビス」と記されているが、「デーヴィス」と統一。本論の最初に出て来た宣教師とは同一人物）の『^{まこと}眞の道を知るの近路』の全文を『本のはなし』に掲載している。秋山は『植村正久と其の時代』第一巻にある記事を解説して、デーヴィスがローマ字で綴った日本語を撰津第一基督公会の信徒の佐治職が日本語に書き直したものとする。内容はアダムとエバに始まる人の罪、イエスの十字架と復活、イエスによる罪のあがないが主となっている。そして、注目すべき信仰者の死後のことについての記述が見られる。此の世において困難がある時にはイエスが恵みを与え、悲しみがあってもイエスがなだめてくれると述べた後に、

亦来世では天國と申す^{よろし}宜ひ處へ御登りなされて神様と一所に何時までも御居^いでなさる事は誠にうれしい喜ばしいことでハ御座らぬか…¹⁹⁾。

とあり、明確に来世の「天國」の存在を示している。天國(天国)の詳しい描写は無いが、「宜ひ處」、「神様と一所に何時までも御居でなさる」という説明で、来世の喜びを語っている。

また、このトラクトの最後には以下のような「祈の文」が載っている。

天に在す^{いま まこと}眞の神よ ^{ねがわく}希は我等の願をききたまへ我等の罪を思ひ悔ひ改むやうに助け給へ
耶蘇を信じ是迄の罪を消すように救ひたまへ神のをきてに従ひ神の子供となるように^{なし}為給へ
死せし後は天國に神と共に^{いつ}何時迄も居る様に^な助給へ神の御慈悲をありがたふ思ふように導きたまへ…²⁰⁾ （下線筆者）

先に挙げた本文に加えて末尾の祈りににおいても死後の「天國」について重ねて加えられている。死後に赴く天国の存在は、デーヴィスが明治初期の日本人に向けて強調したことの一つと考え

てよいだろう。

(2) 『信仰の話』²¹⁾

このトラクトの著者、発行所、刊行年はいずれも不明であるが、秋山は明治10年頃と推測し、明治初期の貴重なトラクトの一つであると言う²²⁾。この書には、「イエスを信ずれば其人は罪の赦しを蒙り、又限りもあらむ福楽を未来の天国に享る事が出来ますから²³⁾」とあり、未来すなわち死後における天国の言及が見られる。結びの近くにも、

しかしイエスを深く信じて神に奉事^{つか}へるならば、心中は大に安慰^{なごやか}になり、仮令^{たとひ}浮世の事に紛擾^{さわら}されても、何時も神からおん撫慰^{なぐさめ}を蒙りまして、よく堪忍^{しんぼう}することができます。且また何も危惧^{いつ}事はなく、よしや臨終^{おそる}の暁になりまして、少しも恐怖^{おそ}れず、却て矮穢^{きたなき}小屋を高潔^{きれい}なる宮殿^{ひきかゆ}に交換^{よろこん}る如く、喜で天国の門にすゝみます²⁴⁾。(下線筆者)

とある。この世の状態を「矮穢小屋」と「宮殿」という比喻を用いて、このトラクトでも死後の「天国」における幸福が強調されている。

続いて、『明治文化全集』に掲載されている四つのトラクトを取り上げる。

(3) 『真理易知』²⁵⁾

宣教師マッカーティーによる中国語の著作で、ヘボンが和訳した。秋山によると中国で出版されたのは1852年であり、ヘボンによる和訳の版木が出来たのは1863(文久3)か64年(元治元年)頃であるが、禁教の日本では印刷できず1867年頃上海で印刷したとされる。『明治文化全集』掲載のものは元治元年となっている。いずれにしても秋山が言うように幕末から明治初期にかけて禁教下で頒布された最も古いキリスト教書である。『真理易知』は、全部で十一章から成る書物であるが、死後についての言及が見られる。

五章 聖書に云く人の命一次死に死にて後審判るるなり
…それ人身死ぬといへども靈魂は死ぬることなし…その靈魂はこれを賜し神にかへるなり
りといひへり。

六章 聖書に云く悪人および彼の神を忘れし諸国の人は地獄におひいれらるべし
…われ前に善悪の報應はみな来世にありと説たり…善の報をうくる處は即ちこれ天国なり。
また悪の報をうくる處は即ちこれ地獄なり。

八章 …われらの心うまれつきて悪きがうへに、また幼少より日々さまざまの悪をおこなひて罪をかさねたれば、みづから救得ざること恰も大水のうちに落ちて自己上ることあたはざるがごとし…耶蘇を信ずるものは必ずその心を堅固し、半途にて信仰の手をゆるめ救の繩をはなつことなく天国の岸に上べし。

五章では人身(肉体)が死んでも靈魂が死ぬことは無いとある。霊肉二元論はキリスト教の教

義ではないが、死後神の元に帰る際の状態を肉体と区別して靈魂という用語で示されることが明治期の文章にはよく見られる。六章では、「来世」における天国・地獄という善悪の報いによる結果が明確に述べられているのが特徴である。八章はそれに関連してイエスを信じることで天国に上ることができるという教えが語られている。

（４）『心の夜あけ』

1873年（明治6）頃に発刊されたものであるが、原著者も原著の題も不明とされている²⁶⁾。しかし「キリスト教のだいたいを平易な、そして整った和文体に書いた好い出来映えの本」で、よく流布したようである。この年の2月に「切支丹禁制の高札」が明治政府により撤去されていることを考えると大きな影響を当時の日本人に与えた書物であったと推測される。

この書物では、審判者や刑罰の言及が目につく。それに伴う耶蘇（イエス）の功や恩徳、中保も強調されている。加えて「天国」に関する言及も多々見られる。

たとえば五章では、まず最後の審判について述べられ、神の民は少しもおそれるべき日ではないとし、キリスト者の死後についての説明がある。

信者は死するとき直に天國へゆき、また天のつかひはかれを耶蘇にともなんとてその枕下にはべることありとおもひおれり。そはげにもまことのことにして、聖徒はこの世にその目をとづるや否やその目を天にひらくべし。されば信者の靈魂はその身死せんとしき全たく潔められ直にさかえに昇るべくぞありける²⁷⁾。

このように信者にとって、死とは天国に入ることであり、しかもそれは死後直ちに起こり、イエスと共にいる「幸い」を得られることが強調されている。その根拠として、使徒パウロが「この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており」（フィリピ1章23）や「体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます」（Ⅱコリント5章8）と述べて天国の存在を示していること、あるいは、ステパノが「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」（使徒7章59）と言って殉教したこと、さらに、十字架上でイエスが罪人の一人に「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ23章43）と言われたことを挙げる。そして、この著者は「人死するの時は天國のはじめなりといふ意をまなびうべきや」と続けるのである。

審判の後におこる聖徒の復活状態についての言及も見られる。「毛虫」が「愛らしき胡蝶」となるように、「おどろくべき変化」をなすという。加えて、聖徒の墓について、「聖徒の墓はたからのかざりを籠めたる函にして、死ぬまじきさいはひなるあしたに甦らさるゝまではしづかに心やすく眠れるやすみのところなるべし」と述べている。

（５）『天道案内』

アメリカバプテスト教会宣教師ジョナサン・ゴープルによるもので、1873年（明治6）に発刊された。このトラクトは1872年（明治5）のヘボンの『三要文』（十戒、主の祈、使徒信条）とともに、最も古い重要な信仰文書であるとも言われている²⁸⁾。内容的には、使徒信条、十戒、

主の祈りが主である。しかし、注目すべきは最後に

第十 イエスフにしたが順ふものに罪の赦しあり。人間この世に在あるあいだのみ罪を亡し得らるべし。死して後た、ちに幸福さいわいに入り或は殃わざわいに入と云ふ事を我等は信仰せり²⁹⁾。

と明記されていることである。天国や地獄の代わりに幸福、殃を用いている。「殃に入」すなわち「地獄」行きが述べられているのは特徴である。

(6)『廟祝問答』

原著は宣教師ゲナールで、米国伝道師バラの名前で出版されていて、翻訳は奥野昌綱である。1874年（明治7）に出版され、明治期の伝道小冊子として広く読まれ、版を重ねたという³⁰⁾。中国の廟の外に坐している祝（「堂守」）とキリスト教伝道者の問答形式により、菩薩神祇ではなく、聖書の神（「まことのかみ眞神」と表現）を信じるように勧めている。特に罪に焦点をあて、眞神の刑罰を逃れることはできないことを説き、「汝らもし心をひるがへし眞神につかへなば、「陰府ちごくの刑場を脱まぬがれて天堂の楽境にすゝむことをえん³¹⁾」という。

この書物でも「陰府の刑場」という表現がある。漢字が異なるが、内容的には「地獄」と同様であろう。眞神による天国の平安より、陰府の恐怖を描いているのが特徴である。

(7)『さいはひのおとづれ わらべてびきのとひこたえ』

子どものために書かれたと思われるものの中で最も古い文書であり、著者はヘボン編、奥野昌綱訳で1873年（明治6）に出版されたといわれる。秋山は、ヘボンの手紙を参照し、このトラクトが実際に子どもたちの「安息日学校」で使用されたと推測している³²⁾。

内容については、全部で145の問答がなされているが、その最後の問140-145、人が死ぬときにどうなるか、あるいはさばきの日について、書かれている。

142、あく人はさばきの日にいかなるや。かれらは地ごくになげいられん。

143、地ごくはいかなるところぞや。おそるべきとおはりなきくらしみのところなり。

144、さばきの日にただしきひと義人はいかなるや。かれらは天にいられん。

145、天といふはいかなるところぞや。さかえなるたのしきところにて、たゞしき人の主とともにかぎりなくあらんところなり。

という問答がなされ、「あく人（悪人）」と「義人」、「地ごく（地獄）」と「天」を二元論的に対比させることで強烈な印象を子どもに与えたと推察する。

以上、明治期初期におけるトラクトを考察した。死後の運命を位置づける天国の存在やそれに関する幸いも描かれているが、すでに確認してきた通り、「天国」と対比する「地獄」の存在の強調も特徴として挙げられる。もちろん、前章で取り上げた説教とここで引用したトラクトを単純比較することはできない。偶然、われわれが考察したものが、その傾向にあったとも

十分考えられる。確認しておきたいことは、明治初期キリスト教における他界観に、天国と対比する「地獄」に関する言及も見られるということである。

4. 讃美歌に表された他界観

(1) 初期の讃美歌から

最後に明治期の讃美歌を考察する。讃美歌は教会の礼拝や集会において必需であり、言葉を記憶させる効力も高い。讃美歌を何度も歌ううちに無意識に歌詞を覚えていることも少なくない。場合によっては説教で語られる言葉よりも記憶に残る。

プロテスタント讃美歌として現存する最古のものは1872年（明治5）の「エスワレヲ愛シマス」（現在使用されている『讃美歌21』の「主われを愛す」）と「ヨキ土地アリマス」の2曲である³³⁾。前者は1～4節までであるが、

1節 エスワレヲ愛シマス、サウ聖書申シマス、彼レニ子供中、信スレハ属ス、ハイエス
愛ス、ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、サウ聖書申ス

4節 エスワカ生涯中、ワカソバ居マス、ワレ死ストテモ、ワレヲ天ニトモノヲ、ハイエ
ス等、

テンポもよく親しみやすい曲であり、早い段階で日本人に翻訳して紹介されたのだろう。4節には、主イエスが生涯私の側に居て、私が死んでも天（天国）に伴うのである、という信仰が見られる。

現存している讃美歌集で最も古いのは『無題』と付いた摂津第一公会讃美歌集と言われており、1874年（明治7）4月に発刊されている。摂津第一公会（現日本基督教団神戸教会）は先にも触れたが、日本で二番目に古いプロテスタント教会である。最古のプロテスタント教会である「日本基督公会」（現横浜海岸教会）は1872年（明治5）に設立されており、讃美歌が当然使用されていたと思われるが、設立当時のものは未発見である³⁴⁾。

『無題』の摂津第一公会讃美歌集³⁵⁾には八つの讃美歌が収められ、「第一」と付けられた讃美歌の1節は

我の神に近づかん よしや憂^{うれひ}に忍びなん
われ歌ふべき吾の神に 近付かましともならん

である。これは『讃美歌21』の434、435番の「主よ、みもとに」と同じものである。この讃美歌は、創世記28章の「ヤコブの夢」に基づいて作られたものであり、死後、神の元に近づいていくという意味ではない。しかし、天国に登るというイメージから、今日でもキリスト教葬儀において歌われることが多い。3節の歌詞を見ると、死後に天に登り行くことをさらに強くイメージさせられる。

我登りて天にゆかん 神よ恵めたすからん
かみの使われをまねき われの神に伴なわん

次にみるのが、『教のうた』という題で十九の讃美歌から成る讃美歌集である。上述の日本基督公会により、1874年（明治7）6月に出版されたものである。その内、他界観に関わる歌詞を含む讃美歌を見てみよう。

「第六」に「摂津第一公会讃美歌集」の「第一」と同じ讃美歌がある。若干訳は異なるが、この讃美歌の持つ上述のイメージが初期のキリスト者たちに与えた影響は大きいと思われる。

「第八」の一節は、「われたるいわや われをかこめな」と始まる。この讃美歌は『讃美歌21』の449番「千歳の岩よ」である。5節に注目したい。

つゆまのいのち きえはてんときに
みぬくにのぼり しゆにまみえんとき
われたるいわや われをかこめな

ここでも、命が消え果てるとき、みぬくに（天国）に登り、主に会うという希望が語られている。ちなみに『讃美歌21』では、そのような歌詞は無くなっており「知らぬ陰府にも 審きの日にも」と訳し直されている。

「第十一」の讃美歌は先の「主われを愛す」の最古版「エスワレヲ愛シマス」の別訳である。4節は「エスいまとともに ゆくみちあゆみ われしぬとても エステんにとみなふ」と訳されている。

「第十四」の讃美歌では、3節に

てんこくはいつもかがやかん いのちかぎりなくあらん
われそこにあそびてん うへないくににわれきせん

とある。天国は常に輝いており、そこで遊び、飢えない国に生きるという希望が語られている。他の讃美歌と比較すると天国やそこにおける希望が具体的なものとなっている。

その後、次々と讃美歌が発刊された。『教のうた』十九全部の版木をそのまま用いて、そこに新しい歌を加えて出来たのが、組合教会讃美歌集『無題』である。1874年（明治7）12月に出版されている。そして、日本基督教会系の讃美歌集である『讃美歌^{さんびのうた}』が同年11月に、『改正讃美歌』が1876年（明治9）に発行された。やがて組合教会系と日本基督教会系の協力により、1888年（明治21）に明治期における「最高傑作」と呼ばれる『新撰讃美歌』が発行されるに至る。

（2）『新撰讃美歌』から

『新撰讃美歌』には、讃美歌ごとにテーマが付けられた。「基督教教徒の死」というテーマで

第197から207番まで、「天国」というテーマで第208から213番の讃美歌がある（実際の讃美歌番号は漢数字）。そして「基督教教徒の死」の後には、さらに小テーマが付けられている。例えば197番は「基督教教徒の死 死近し」198番は「基督教教徒の死 死別を慰む」199番は「基督教教徒の死 死は生の門」といった具合である。

197～213番までの讃美歌のなかで他界観に関して、「天国」に関する言葉を分類して列挙する。（ ）内は讃美歌番号。

・天国の状態、その比喻（くに、ふるさと）

「とこしへのふるさと」「あめのふるさと」（いずれも197）

「みくにはうごかず とこしへにさかゆ」（203）

「ちゝのみくには うごきなく たのしみみちて たゆるなし」（208）

「たのしきくにあり」（210）「はるかうえなる たのしきくにぞ」（212）

「とこしへのはるに しほまぬはな にはへるところぞ わがくになる」（210）

「あまつふるさと」（211）

「うるはしき そのくに」（213）

・天国における死者の状態（休息、喜び、楽しみ）

「みくにのやすみ」（199）

「われらのやすみは あめにあれば」（202）

「わがやすきすみか」（203）

「とこしなへに よろこびある くゝぞいらん」（205）

・天国における希望（主との出会い）

「主にまみゆる日も いまはちかし」（197）

「死は主にまみゆる 門にぞある」（202）

「ちゝのみかはをば うちあふぎて ふところに休はん」（209）

・天国における希望

「ふたゝびあひみて とともにかたらん」（198）

「いまわかるれども あめにてあふ日 みむねをよろこび ともぞうたはん」（201）

「たのしきみそのに ふたゝびあひて かみのめぐみを とともにぞうたはん」（204）

主が生きておられるので死を怖れることはなく、死は滅びではないという讃美歌（199）や死の刺（はり）がどこにあるかと死に対する勝利を歌う讃美歌（200）もあるが、全体的なテーマをまとめると、天国とそこでの状態、希望が歌われているものが多い。天国は永遠に栄える国であり永遠の故郷である。天国では休息が得られ、喜びに満たされる。主に会えることができ、今地上にある者と召されたものがやがて再び会える場所である。罪の裁きや赦しの問題が出てくることは少なく、むしろ平安と慰めを与える歌詞という印象がある。

なお、このような讃美歌の傾向は時代とともに変化するようになる。中道基夫は、明治以降の葬儀賛美歌においては、天国における再会をテーマとしていたことを指摘する。そして天国

を描写する「ふるさと」や「岸」という「日本的叙情性」のある表現に注目し、葬儀における「遺族への慰め」としての効能について論じている。また、『讃美歌21』では「復活」をテーマとした賛美歌が多数挙げられ、葬儀のテーマとして「復活」が前面に出てきていることについて言及している³⁶⁾。何故「天国での再会」といったテーマが現行の『讃美歌21』では見られなくなったのか。そこには今日の神学的傾向という事情があるのだがここで詳しく論じることはできない。しかし、そのテーマが「日本的叙情性」という視点で削除されるのは再検討が必要であると思われる。たしかに、この叙情性は場合によっては異教的ともいえる思想を生み出す危険性を持っているが、それでも「遺族への慰め」という点では非常に重要であり、かつ非キリスト教的なものとは言えないのである。中道の「葬儀の中において叙情性豊かな歌が歌われ、理性ではなく感性に働きかけるのも必要である」³⁷⁾ という主張は重要である。

おわりに

われわれは、明治期における説教や論文、トラクト、讃美歌を通じて、そこに表現されている他界観を考察してきた。確認できたことは、他界としての「天国」についてである。天国は、死者が神と出会い、永遠の幸福に与る場所である。この世における悲しみと天国における喜びの対比により、天国における幸いが際立っている。さらに天国は、すでに亡くなっている死者との再会、未来に天国に行く者との再会を可能とする場所である。この他界観が、人々の臨終における不安を払拭し、愛する者を失った遺族や友を慰めるものとなったと考えられる。「地獄」については、特にトラクトに多く見られたが説教や論文には多くを認めることはできなかった。トラクトは広く一般に伝道用に配布されることから、福音のわかりやすさを考慮したのかも知れない。殆どの日本人が仏教徒であった時代ゆえに、「地獄」という概念を比較的 naturally 受容できたとも思われる。しかし、明治期のキリスト教会において、天国か地獄の択一という他界観が主流であったとは認め難い。

着目しておきたいことは、他界の具体的描写が無いということである。天国での幸いという表現はあっても、幸いの内容や神と共にある状態についても詳細は不明である。聖書に記されていない異教的要素が入り込むことに、細心の注意を払っていたことが感じられる。そのことで正統的なキリスト教信仰を保持することができたのと同時に、日本人が持っていた死生観や他界観の否定につながり、祖先供養等の実践をめぐる信者と非信者との間に軋轢を産む結果になったのかもしれない。

明治期の他界観を考察したことで、今日のキリスト教会における他界観との相違点を知る材料を得ることができた。明治期では天国のイメージや天国における再会の希望に関するメッセージが強調されていたが、今日ではそれが弱まっている。なぜそうなったのかを今後検討していきたい。

注

- 1) O. ケーリ『日本プロテスタント宣教史 最初の50年(1859-1909)』、江尻弘訳、教文館、2010年、143頁。
- 2) 長女肇は1873年5月8日没、ここで出てくる娘は1878年3月29日没。

- 3) 新島襄全集編集委員会『新島襄全集 2 宗教編』、同朋舎出版、252-254頁。明治20年1月の説教。
- 4) 同書、261-263頁。明治20年3月の説教。峰は山本覚馬の先妻の子。
- 5) 同書、265-269頁。1899年3月の説教。沢山は浪花教会牧師。34歳で死去。
- 6) 植村正久『植村全集 第一巻 説教編 (上)』、植村全集刊行会、1933年、525-538頁。1902年8月に行われた講演。
- 7) 同書、525頁。
- 8) 同書、526頁。
- 9) 同書、534頁。
- 10) 1878年(明治11) M・C・ハリスより受洗。
- 11) 内村鑑三『内村鑑三選集 8』、岩波書店、1990年、23頁。「愛するものゝ失せし時」はもともと『基督教徒の慰』(1893年(明治26))の第一章に掲載されたもの。妻かずを失った出来事による。
- 12) 同書、156-159頁。『聖書之研究』141号、1912年(明治45)に掲載されたもの。
- 13) 同書、160-165頁。もともとは1912年(明治45)『家庭と宗教 如何したら平和に死ぬるか』内村鑑三口述、加納久朗筆記。
- 14) 明治30年安中教会の牧師となり、昭和13年までこの地で逝去。
- 15) 柏木義円『柏木義円集 第一巻』、未来社、1972年、238頁。
- 16) 藤井武『藤井武全集 第一巻』、8頁。
- 17) 山室軍平『平民之福音』、救世軍本営、1899年、184頁。
- 18) 秋山憲兄『本のはなし—明治期のキリスト教書』、信教出版社、2006年、42-45頁。
- 19) 同書、44頁。
- 20) 同書、45頁。
- 21) 同書、52-57頁。
- 22) 同書、52-57頁。
- 23) 同書、53頁。
- 24) 同書、57頁。
- 25) 吉野作造編『明治文化全集 第十一巻』、日本評論社、1928年、229-236頁。
- 26) 『明治文化全集第11巻』では、奥野昌綱が著者となっている。しかし、秋山によると、書名は『心の夜明』で、1873年(明治6)頃押川方義が訳し、奥野昌綱の筆による木版の和本、共立女学校校長クロスビーにより出版されたと紹介されている。秋山は自分の所蔵本には、原書名も著訳者名もなく、『日本キリスト教文献目録』では『心の夜あけ』Duff: The Child Book of Divinity となっていると解説している。
- 27) 『明治文化全集 第十一巻』、265頁。
- 28) 秋山、前掲書69頁。
- 29) 『明治文化全集 第十一巻』、276頁。
- 30) 秋山、前掲書、67頁。
- 31) 『明治文化全集 第十一巻』、83頁。
- 32) 秋山、前掲書、98頁。
- 33) 尾崎 安編『近代日本キリスト教文学全集15 讃美歌集』、教文館、1982年、11頁。
- 34) 茂洋「明治初期讃美歌と神戸」、「神戸と聖書」編集委員会編、『神戸と聖書—神戸・阪神間の450年の歩み』、2001年、102頁。
- 35) 『近代日本キリスト教文学全集15 讃美歌集』、15-18頁。
- 36) 中道基夫「日本における葬儀讃美歌のインカルチュレーション」、『神学研究52』(関西学院大学神学研究會)、193頁。
- 37) 同書、194頁。

(原稿受理日 2012年10月1日)